

明治後期の〈日本〉旅行

——イギリスからの旅と〈ガイドブック〉——

五井 信

一九〇八年九月一日から「朝日新聞」に連載された夏目漱石『三四郎』で印象に残る場面として、主人公小川三四郎が熊本から上京する際の、のちに広田先生とわかる男との出会いのそれをあげることができ⁽¹⁾るだろう。交わされはじめていた二人の会話が浜松での停車中に少々熱を帯びることになり、日露戦争で勝った日本がこれから発展するでしょうといった三四郎のコメントに対し「亡びるね」と男が応える場面である。

その場面の冒頭で、二人は停車している列車の前を歩く西洋人に窓から「見惚れて」もいたのだが、その「西洋人」がイギリス人あるいは英語圏の人物であるなら、彼ら、彼女らが携える鞆の中には、『Murray's HAND-BOOK JAPAN』と記された赤い表紙の〈旅行ガイドブック〉が入っていたに違いない。もう少し丁寧に記すなら、その本はロンドンにあったジョン・マレー社 John Murray から一九〇七年六月一五日に出された『A Handbook for Travellers in Japan』の第八版ということになる。同書から、三四郎と男が西洋人を見かけた「Hamamatsu」の記述を引用しよう⁽²⁾。

Hamamatsu (Inns, Ōgome-ya, Hana-ya, at station) is the only place between Shizuoka and Nagoya where the journey can be broken with any comfort. The town derives a peculiar appearance from the use of long projecting eaves, which cause the house to look as if about to tumble forward into the street.

いままで『三四郎』が読まれる際に、「浜松」という地名は意識されない、あるいはせいぜい男が言及する「富士山」と関連してだけ了解されてきたのではないか。つまり「今に見えるからご覧なさい」と男がいう富士山の姿があらわれる手前の駅、という具合にだ。だが引用からわかるのは、その理由に加えて、「列車の前を往つたり来たり」する「西洋人」を登場させるために「浜松」という場所（『固有名詞』）が選ばれたことである。その前後の駅であったなら「西洋人」が列車から降りることはなく、三四郎と広田とのやりとりはまったく異なるものになったはずなのだ。

さて、小論では一九〇〇年代という約一〇年間を背景に、この旅行ガイドブックの分析がなされることになるだろう。一九〇〇年代という一〇年間は、大まかにいうなら、その後約二〇年間継続されて両国を結びつけることになる日英同盟 The Anglo-Japanese Alliance が一九〇二年に結ばれてそれを一つの機会に日本が日露戦争で勝利をあげた時期、イギリスにとつては、一九〇一年にヴィクトリア女王が死んで影がさしつづあるとはいえ、いまだ「イギリス帝国 The British Empire」と称されて植民地を獲得していた時期である。またその時期は、〈日本〉に関する情報が多くイギリスに伝えられ、興味が向けられた時期でもあった。三年間の準備期間を経て、ロンドンで日英博覧会が開催されたのが一九一〇年である。博覧会には、約五ヶ月間でのべ八三五万人もの観客が足を運んだという⁽³⁾。

その時期の〈日本〉への旅行はどのようなものであったのか⁽⁴⁾。また、その時期に書かれた英語の旅行ガイドブックという言葉空間において、〈日本〉はどのように表象されているのだろうか。われわれの興味はそのようなところにある。ひとまず、当時のイギリスからの旅と『A Handbook for Travellers in Japan』について、その概略を見ていくことにしよう⁽⁵⁾。

一

漱石がロンドン留学から帰国の途についたのは一九〇二年二月五日、テムズ川のアルバート・ドックからの日本郵船の

博多丸によってであった。それから六年後の一九〇八年五月三〇日には、アメリカからフランスに渡っていた永井荷風が、やはりロンドンから日本郵船の讃岐丸に乗船して日本に帰っている。^⑥五月二八日朝にパリを発ち、ロンドン滞在わずか二泊という行程だ。『荷風全集』所収の「年譜」によると、荷風の父久一郎は文部省を退いたのちに日本郵船会社に入社し、上海支店支配人を経て一九〇〇年二月からは横浜支店長になっていた。一九〇三年九月に荷風が渡米のために使ったのが同じく日本郵船シアトル線の信濃丸だったのは、だからけっして偶然ではなかったはずだ。

日本郵船株式会社は、岩崎弥太郎が設立した郵便汽船三菱会社と反三菱財閥勢力が投資して誕生した共同運輸会社とが、一八八五年に帝国政府の命令で合併して開業した海運会社である。^⑦当初は国内航路を中心としていたが、日本国内で鉄道網が整備されるのにもなって対外航路の拡張へと舵を切り、一八九六年には欧州航路を開通させている。その後、日本郵船は月に一回の航海だった欧州航路を二週一回に増強し、また太平洋航路や豪州航路を開設したことなども加わって、一九〇一年には世界第七位の海運会社に成長していた。漱石や荷風がロンドンから乗船した当時において、すでに世界主要都市との間に航路を持っていたわけである。ちなみに註(7)にあげた『日本郵船株式会社創立満三十年記念帖』には、一九一五年当時の「鑑査役」として有島武郎の父武の名前と写真が掲載されている。

イギリスから〈日本〉への旅行客は、いってみれば漱石や荷風にとつての帰国の道を往路として辿ったわけである。^⑧日本郵船の航路を例にするなら、ロンドンを出発した船は地中海に入ってマルセイユに寄港し、それから一八六九年に開通したスエズ運河、紅海を抜けてコロンボ、シンガポール、香港、上海……という具合だ。『ふらんす物語』では、地中海に入って間もなくの船の様子が〈自分〉によって次のように語られている。

下の甲板から、此の時、印度の植民地へ出稼ぎに行くイギリスの鉄道工夫が二三人と、香港へ行くとか云ふ身元の知れぬ女とが、声を合せて歌ふのを聞付けた。(中略)聞き澄して居ると、イギリスの労働者が、海を越して遠く熱帯の地に出稼ぎに行く其の心持が、三等室の汚い甲板の薄暗い有様と釣合つて、非常に能く表現されて居る。(黄昏の地中

海〕

引用から、乗船客における「階級差」ともいえるべき差異を読み取ることがたやすい。一、二等寢室がホテル並みの設備を誇ったのに対して、三等寢室は狭い上下二段の棚に各自一枚の筵を敷いて寝起きする状態だった。『ふらんす物語』の〈自分〉が乗ったのが一等船室か二等船室かは判然としないが、註にあげた二葉亭が病氣におかされたロシアで当初は往路同様のシベリア鉄道による帰国を望んだのは、海路のほうが倍近い費用のかかることがその大きな理由だった。⁽⁹⁾ イギリスからの旅行者たち（それはけっして出稼ぎに行く労働者ではない）にとって当然のことながら〈日本〉は遠い国で、その旅行は時間、費用ともにそれなりの負担の可能な人たちによるものだった。そしてまた、引用で見落とされてならないのが、「印度」であれ「香港」であれ、そこがイギリス帝国の植民地だったことである。イギリスは、文字通り「太陽の沈まない国」だった。こういった事情が『A Handbook for Travellers in Japan』の形態や内容にも確実に影響を与えているのだが、われわれは、いましばらく同書をめぐる物語を見ていこう。

ジョン・マレー三世 John Murray III が、『A Handbook for Travelers on the Continent』をロンドンで発行したのは一八三六年のことだった。⁽¹¹⁾ 同書はマレー自身がヨーロッパを旅行した際にノートに記した旅行地の歴史や建築物、地理や実際の情報などをルートごとにまとめたもので、それがルートつき旅行ガイドブックの嚆矢とされている。〈ガイドブック〉とは、旅行者をガイドするとともに、彼ら、彼女らが現地ガイドを雇わずにすませるための書物なのだ。おりしもヨーロッパは鉄道網の急速な発達にともなって旅行者は増加の一途をたどっており、もちろん、その多くはガイドを雇う余裕のない旅行者であった。マレーの旅行ガイドは好評によりやがてシリーズ化され、赤い表紙のこのガイドブックはヨーロッパ全土を網羅するまでになる。全盛期には六〇種類（地域）をこえるガイドブックをマレー社は発行していた。旅行ガイドブックとしてよく知られるドイツのベディカ Baedeker も、そのシリーズを立ち上げる際にマレー版の形式を採用したといわれている。⁽¹²⁾

マレー社はまた、ダーウインの『種の起源』（一八五九年）や、日本では中村正直訳『西国立志編』として出されたスマ

イルズの『Self Help』（同年）を世に送り出したことでも知られている。それら二冊のベストセラーやハンドブックシリーズで大成功をおさめたマレー社だったが、ジョン・マレー三世の死後である一九〇一年に、日本版とインド版をのぞいてシリーズはスタンフォード社 Stanfords に売却された。インド版が残された理由はわからないが、日本版に関しては以下に述べるように、ガイドブック編集という煩雑な実務にマレー社本体がほとんどタッチしていないという日本版特有の事情があったようだ。

『A Handbook for Travellers in Japan』は、そもそもは一八八一年に『A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan』というタイトルで出されたもの（以下初版という）が源流である。この初版の著者は、駐日イギリス公使館の日本語書記官だったアーネスト・サトウ Ernest Mason Satow と元英国海軍士官のホウス A. G. S. Hawes の二人で、ともに当時は日本に在住していた。『一外交官の見た明治維新 A Diplomat in Japan』（一九二二年）の著者として知られるサトウは一八六二年からイギリス公使館に勤務しており、あらためて記すまでもなく、当時を代表する日本学者である。また初版の発行所は、ジョン・マレー社でもなかった。本の扉には横浜にあったケリー商会 Kelly & Co という名が記されている。『The Japan Gazette Hong List & Directory』（一八七九年）¹⁴によるとケリー商会は上海に本社をおく会社で、英米の書籍や新聞雑誌、たばこの販売のほか印刷、出版なども行なっていたようだ。同書では、レンガ造りの瀟洒な建物のケリー商会のイラストも見ることができる。

〈日本〉在住の著者によって〈日本〉で印刷、発行されたこの初版は、序文に「In the arrangement of this work, the model of the widely known "Murray's Handbooks" has been followed as far as was practicable.」¹⁵とあるように、当初からマレー社版ガイドブックを強く意識していた。縦が約一八センチ、横が約一二センチという体裁は、もちろんマレー版ガイドブックと等しい。また内容も全体が約五〇〇ページで、他の多くのマレー版ガイドブックと同じように、最初にその国の簡単な導入編 Introduction が記され続いてルートが紹介されている。導入編としては「地理」「気候と天候」など一五項目

が並び、ルートは「東京とその近郊」「横浜」などをはじめとして「Central & Northern Japan」というタイトル通りに北は「新潟から青森」から西の「大阪」までの計五四ルートが紹介されているのだ。

前にみた「Hamamatsu」の項目からもわかるように、ガイドブックの記述は詳細なものだ。そしてたとえば鉄道網の拡大とその路線や駅に関する情報提供ということを想像すれば理解できるように、旅行ガイドブックにおいて、そこに記される内容の詳細さ、正確さは何よりも重要である。そのためガイドブックは、いわば宿命として改訂版が期待されることになる。サトウらが出した〈日本〉版に関しても、初版が間もなく品切れになったことも重なって一八八四年には第二版が発行されているのだが、この第二版から発行元としてはマレー社が加わって同じタイトルでありながら表紙には「Murray's」の語が記され、また印刷がロンドンでなされることになった。巻末に掲載された広告ページも、初版が日本におけるホテルや商店などだったのに対して、ヨーロッパ各都市のホテルの広告が七〇ページほど続くものに変更されている。ただし第二版には発行元の変更には何も言及がなく、あたかもシリーズの延長として再版が出されたかのように記される。

The first edition of this Handbook having been exhausted, the Authors have taken advantage of the opportunity thus afforded to revise many portions, and to make considerable additions.

そして引用にもあるように、この版では大幅な改訂が加えられ、さらに導入編だけでも一〇〇ページほどの情報が新たに付け加えられた。たとえばそこには「日本風風呂」という項目が加わっている。

The Japanese people in general are more fond of bathing than any other nation in the world, but whilst in other countries cold baths are indulged in, the Japanese prefer very hot baths of a temperature which at first seems quite unbearable to Europeans, namely 110-120 Fahr. Soon, however, we get accustomed to this *o yu* or *furo*, as it is called, and find it not only comforting in winter, but also refreshing in summer.

ヨーロッパから遠い極東の国における風呂文化の懇切丁寧な説明は微笑ましくもあるのだが、しかしわれわれが見落として

てならないのは「Japanese people」に呼応する語が、引用においてだけでも「any other nation」から「other countries」「Europeans」そして「we」へと変化していることである。読者を「Europeans」「we」という語にたぐり寄せる語り——。このような「語り」が、一種のオリエンタリズムに基づいていることは間違いない。だが考えてみると旅行ガイドブックとは、「見る／見られる」という関係が特化してあらわれる場所であり、読者を「見る」立場（＝we）に強力に引き寄せる磁力の働く場所ではないのか。ここでは「Japanese people」に呼応する「they」が潜在している。「見る者（＝we）」と「見られる者（＝they）」が対峙する旅行という場において、ガイドブックの読者はいつもつねに「見る者」なのだ。

そのような特徴を持つ媒体であるからこそ、外から見る者（読者＝旅行者＝we）の「日本」にまつわる欲望が、あるいはそこに在住しているイギリス人（著者＝we）にとつての見せたい「日本」のありようが、まさに露呈される場が『A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan』や第三版以降の『A Handbook for Travellers in Japan』だったということができる。後に述べるように事情はいま少し複雑でもあるが、ではそのような「日本」を対象としたガイドブックは、誰によって、何が、どこが、どのように、記されているのか。

二

われわれがおもに対象とする一九〇七年に出された『A Handbook for Travellers in Japan』第八版の著者は、バジル・ホール・チェンバレン Basil Hall Chamberlain とメイソン W. B. Mason の二人である。サトウからチェンバレンへのそれを中心としたこの著者の変更は第三版でなされていた。タイトルも『A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan』から『A Handbook for Travellers in Japan』に変更され、印刷も再び日本に場所を戻している。マレー社の名前の付されたガイドブックが日本で執筆、編集、印刷されて販売もされるが、同時に何部かがロンドンに送られて他のシリーズと一緒に

イギリスの書店に並べられた、ということだろう。もちろん、たとえば八版なら中扉の裏に小さく印刷された「Printed by the Shueisha, Tokyo」という一文を見つけないかぎり、それが日本で印刷、出版されたと見抜くのは困難であるのだけれど……。想像するに、同書はイギリスから〈日本〉へ来る旅行者だけではなく、〈日本〉に住んでいて〈日本〉旅行へ出かけるという読者も多かったはずだ。そのような出版形態は、最終版となった一九一三年の第九版まで続いた。

チェンバレンはもちろん第二版までのサトウ同様に広く知られる日本学者で、八版が出た時点での肩書きを奥付から転記すると「英国人 東京帝国大学名誉教師」である。チェンバレンへの著者の変更は、おそらくサトウの離日が大きな原因であろう。三版の序文でも、変更にまつわる理由が詳しく記されることはない。ここでは、チェンバレンがサトウらによる初版から執筆に協力していたこと、第三版以降にも二版までの内容が多く継承されていることを指摘するにとどめておきたい。ところで、註(11)にあげたリスター Lister によると、日本版はマレー社の他のガイドブックにくらべて学術的な面で秀でているという。リスターは、そもそもマレー版ガイドブックというものが、旅行をガイドするだけではなく、海外で粗暴な振る舞いをするイギリス人に向けて外国での振る舞いや旅行先に関して教育することも役割の一つだったと指摘する。その意味でマレー版ガイドブックの学術性はその特色の一つで、日本版に関しても例外ではない。だがわれわれが日本版を手にして感じるのは、そのことを承知した上でさらに感じられる、日本版が持つ過剰ともいえる学術性なのである。

日本版が学術的であった理由としては、一つにはサトウとチェンバレンという傑出した日本学者の存在をあげることができるのだが、執筆者の名前をながめながら想起されるのが、初版が出された時代の日本におけるイギリス人たちの緊密な相互関係であり、彼らを結びつける日本アジア協会という存在だ。たとえばサトウの日記には、初版が発行される二年前の一八七九年九月二五日の項に「そこから芝のチェンバレンの家にゆき、夕食時まで、二人で少々ピアノの連弾をした。ホーズが夕食に加わったので、はなしはもっぱら『旅行案内』のことになった⁽¹⁵⁾」と記されている。日本版ガイドブックの著者全四人中、三人がその日に集っていたわけである。一八九〇年代半ばの横浜に住む西洋人の数が約二五〇〇名だったという報告

を考えあわせても、当時の日本をめぐるイギリス人たちのコミュニティが想像以上に密だったことが了解されるだろう。

「日本アジア協会 The Asiatic Society of Japan」は一八七二年にイギリス人とアメリカ人を中心に横浜で設立された日本研究団体で、〈日本〉に関する研究発表を行なう例会の開催とそれを記した紀要の発行をおもな活動として現在でも活動を続けている。明治初期においては日本に関する情報が少なく、研究発表という形で各自の研究成果を共有しようと考えての設立だった。そして奇しくも、外交官や御雇^{おやと}外国人によるその発表の場は日本研究の端緒となった。当時のメンバーとしては、紀要の一〇一〇号で一八編の論文を寄稿しているサトウをはじめとして、ローマ字で知られるヘボン James Curtis Hepburn や『日本書紀』を翻訳したアストン William George Aston、「日本アルプス」の命名者で冶金技師、考古学者としても知られるガウランド William Gowland、あるいは小泉八雲などの名前が並び、もちろんホウズや後に会長をつとめたチェンバレン、またメイソンも会員だった。『A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan』初版には、同協会の紀要からの転載が本文中にあるとの断りが記されているし、またガイドブック執筆者の多くが日本アジア協会のメンバーでもあった。

このような優れた執筆陣を後ろ盾として持つ『A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan』は、とくに増補、改訂が加えられた第二版は、その時点での日本研究の到達点が記されていたといっても過言ではない。小さな活字で密度高く組まれた内容が、旅行ガイドブックとして必要なかという疑問も浮かぶほどだ。だが、〈日本〉国内で出版までの主要な実務作業を行なっているという事実によってそのような振る舞いが許されたであろうし、またそれを手にする旅行者の経済的豊かさが（旅行者は荷物を自分で持たなくてもよい階級の人々が中心であった）形態としての本の厚さを許容したはずだ。⁽¹⁸⁾ 日本版の突出した学術性とはこのような日本版特有の事情から生じたはずであり、またベティカなど他の出版社が日本版ガイドブック出版に参入しなかったのは、優秀な執筆者の囲い込みともいえる日本版をめぐる状況も一つの理由であったに違いない。⁽¹⁹⁾

第三版でなされたサトウからチェンバレンへの主要な著者の変更が、同時に全体のページ数を減らして簡便にするなど、

実用性という面を打ち出していることはたしかである。しかしそれでも、基本的に日本版らしさはそれ以降も引き継がれており、たとえば第八版の導入編冒頭の「概説」には次のような記述がある。

In Japan, more than in any Western country, it is necessary to take some trouble in order to master such preliminary information; for whereas England, France, Italy, Germany, and the rest, all resemble each other in their main features, because all have alike grown up in a culture fundamentally identical, this is not the case with Japan. He, therefore, who should essay to travel without having learnt a word concerning Japan's past, would run the risk of forming opinions ludicrously erroneous.

このように、導入編の冒頭から、〈日本〉と西洋諸国との差異を強調して読者＝旅行者にも事前に日本について学ぶことが求められる。では、「Japan's past」とは何についてのか、具体的には何を学ぶことが推奨されているのか。

本の構成としては、おそらくそれに続く導入編が学ぶべき対象ということになるのだろう。たとえば第八版の導入編は全体で九五ページ、二九の項目が並べられている。「蒸気船」「税関」「祝日」など実用的な項目に続いて「芸術」「日本史の概略」といった項目が並ぶのだが、そのなかで、「言語」の占めるページ数が多いことは理解できるだろう。現在の旅行ガイドブックでも見られるもので、基礎的な単語と簡易な用例が日英対照で並ぶページである。目にとまるのは宗教に関する記述が多いことで、「神道」「日本仏教」「神々たち」の三項目に合計で約二〇ページが割かれている。そのうち、「神道」の項目から引用しよう。出雲大社の折り込みイラストが挿入された全四ページほどのうちの一段落である。

Shintô has scarcely any regular services in which the people take part, and its priests (*kannushi*) are not distinguishable by their appearance from ordinary laymen. Only when engaged in presenting the morning and evening offerings do they wear a peculiar dress, which consists of a long loose gown with wide sleeves, fastened at the waist with a girdle, and sometimes a black cap bound round the head with a broad white fillet. The priests are not bound

by any vows of celibacy, and retain the option of adopting another career. At some temples young girls perform pantomimic dances which are known as *kagura*, and assist in the presentation of the daily offerings. They likewise are under no vows, and marry as a matter of course. The services consist in the presentation of small trays of rice, fish, fruits, vegetables, rice-beer, and the flesh of birds and animals, and in the recital of certain formal addresses (*norito*), partly laudatory and partly in the nature of petitions. The style of composition employed is that of a very remote period, and would not be understood by the common people, even if the latter were in the habit of taking any part in the ritual. With moral teaching, Shintō does not profess to concern itself. "Follow your natural impulses, and obey the Mikado's decrees;"—such is the sum of its theory of human duty. Preaching forms no part of its institutions, nor are the rewards and punishments of a future life used as incentives to right conduct. The continued existence of the dead is believed in; but whether it is a condition of joy or pain, is nowhere declared.

「神道」の項目執筆はもとほサトウによるもので、最初に掲載されたのは第二版、一〇ページ近い内容であった。八版に至る過程でページ数は半分ほどになったのだが、それでも充実した内容であることに変わりはない。ここでは記されている内容だけではなく、その記され方やいい回しにも着目したいと思う。

まず気づくのが、「定期的な礼拝はほとんどない has scarcely any regular services」「独身の誓いに縛られることはない are not bound by any vows of celibacy」「つかかなる誓いもなく under no vows」「一般の人に理解されることがなく would not be understood by the common people」「あつにも述べられなく is nowhere declared」などに代表される打ち消しや否定のいい回しが続くことだ。また「奇妙な服を着用する wear a peculiar dress」「当然のいふとして結婚する marry as a matter of course」といった表現にも出会ったろう。さらに引用では記されないが気をつけたいのが他の宗教に対する言及で「神道」の項目全体では「仏教」という語が数多くあらわれ、あるいは「ヒンズー教の神々 Hindu deities」やイスラム教を

想起させる「メッカ the Mecca」という語も使われている。だが、そのように「神道」という項目全体に範囲を広げてみても、けっして使われることのないのが「キリスト教」という一語なのである。

注意したいのは、このような記述をサトウやチェンバレンなどの神道に関する知識不足や偏見として回収してはならない、ということだ。⁽²⁴⁾ここにあらわれているのも〈ガイドブック〉という媒体が持つ性格であり、「見る／見られる」という明確な境界から生じた結果の一つなのである。著者や執筆者の知識不足ではなく、これからその地に旅行しようとする者が読者であるという前提が、差異を強調した記述にさせるのだ。さらには、「見られる」べき対象としての〈日本〉を表しながら自らについては述べられないことが、読者＝旅行者（＝we）を透明化、そして普遍化させる働きをする。もちろん日本版に限られたことではないが、ガイドブックという媒体の性格が、読者＝旅行者（＝we）のありようを強化させてしまう、といってもよいだろう。

三

結論めいたことを先に述べると、『A Handbook for Travellers in Japan』第八版で表される〈日本〉の姿は、曖昧な、あるいは両義的な存在としてのそれである。たとえば、導入編「概説」には次のような個所が見受けられる。

The war with China in 1894-5 again marked an epoch. Not only did its successful issue give an extraordinary impetus to trade and industry, but the prestige then acquired brought Japan into the comity of nations as a power to be counted with. Another point has become clear of late years,--Europeanisation, after all, is not to carry everything before it. Along many lines the people retain their own manners and ways of thought; they even, to a great extent, retain their own dress. Japan, though transformed, still rests on her ancient foundations.

引用で示される〈日本〉の姿は、日清戦争の成果として威信 (prestige) を獲得しながらもいまだ古来の基盤 (ancient foundations) にとどまっている、というありようである。確認しておけば、ここで問題としたのは事実としての日本のありようではない。そうではなく、日本に住むイギリス人たちにとって旅行者に見せたい〈日本〉のありよう、しかも、ガイドブックという媒体の性格から生じる〈日本〉の姿である。『A Handbook for Travellers in Japan』第八版を読み進めてきたわれわれは、最後に同書で記される場所について見ていくことになる。具体的に〈日本〉のどこが、どのように表されているのか――。

前に述べたガイドブックという媒体自体が持つ記述の詳細さ、正確さという点から〈日本〉の領域について見てみると、『A Handbook for Travellers in Japan』がその拡大を正しく反映していることがわかる。一八九九年に出された第五版、および一九〇一年の第六版にはタイトルの下に「the whole Empire from Yezo to Formosa」という一句が加えられて、日清戦争後に清から割譲された台湾が本文中でもさっそく旅行ルートとして紹介されている。日露戦争が終了してから出された第八版には、「including the whole Empire from Saghalien to Formosa」という記述が加わった⁽²⁾。いうまでもなく日本の近代化は、琉球、アイヌ・モシリ、台湾、樺太、朝鮮半島……へと拡大した帝国の歴史でもあったのだが、八版には新たに加えられた樺太がルート⁸⁴ 「The Island of Saghalien」として掲載されているのだ。だが、そこでの記され方が他の場所に関してと少々異なっているのも事実である。

The Treaty following the Russo-Japanese war of 1904-5 restored to Japan the portion south of the 50th degree N. lat., with an area of approximately 12,000 square miles. About three-fifths of the island remain in Russian hands.

一七世紀初頭の探索に始まる樺太の歴史事項が記され、引用にあるように日露戦争後の北緯五〇度以南の返還 restored についても語られるのだが、以下に続く記述でも中心となるのは樺太の歴史、地理といった学術的な面であって旅行者向けの「案内」ではない。読者＝旅行者が、その地に行かないことを前提に書かれているようにさえ見えるのだ。

ここで考えたいのが、〈旅のエコノミー〉とでもいふべき力学についてである。当然といえばそれまでだが、ガイドブックの読者＝旅行者は、そこに記される土地やルートすべてを辿るわけではない。時間的、経済的制約のなかで訪れる土地やルートを選択するというのが、旅行者の実際の姿であるはずだ。旅行者に対するガイドブック自体の振る舞いもそれに沿ったもので、〈旅のエコノミー〉をもとにしたとき、「樺太」はおそらく旅行者にとってふさわしい場所ではないという判断がなされたのだろう。だがガイドブックの装いとして記述それ自体は必要で、また記述の形式も、あくまでも読者＝旅行者の選択を重視したものとなる。たとえば『A Handbook for Travellers in Japan』第八版では全八六ルートが紹介されているのだが、そこから先の選択は読者＝旅行者に委ねられている。「お好みでどうぞ」というわけだ。

だが本来、〈日本〉（に限らないのだが）をめぐるルートは無数にあるわけで、第八版で紹介される八六ルートでさえ、〈旅のエコノミー〉にもとづいて選択されたものであることを忘れてはならない。そして原理的にいえば、ガイドブックもとにした旅行はいつもつねに信頼に足る先行者の跡を辿るものである。「名所」や「歌枕」といった語を持ち出すまでもない。旅行者の行く先はガイドブックに記された「あの場所」なのであり、そして「あの場所」に行くことが、そこを含めた国なり地域なりに行ったことの証となる。では日本の場合、どこに行くことが〈日本〉旅行の証となるのか。

『A Handbook for Travellers in Japan』第八版の導入編には「Where to go and what to see」という項目が立てられ、またそれとは別に「Outline tours」という項目も置かれている。ともに著者が推す場所の固有名が記され、とくに後者では横浜、神戸、長崎といった寄港先からの一ヶ月ツアー三種類と、太平洋を渡って横浜に上陸し神戸から再び乗船してアジア諸国に向かう旅行者向けの二週間ツアーが紹介されている。まさに〈旅のエコノミー〉にもとづいた、おすすめコースだ。そこにはもちろん京都や奈良といった場所も記されるのだが、それらと並んで、推奨される四種類すべてのツアーに記されている地名が「日光」と「宮ノ下（箱根）」である。日光と宮ノ下の、それぞれ東照宮、中禅寺湖や富士山との関連を考えると選ばれることに不思議はない。だが、それでもこの二ヶ所は突出した印象を与える。

日光について私的な記憶を掘り起こすと、田山花袋の『日光』（一八九九年 春陽堂）に目を通していて驚いたことがある。向ひの別荘には、昨日西洋人の一群来りたり、（中略）かくて今まで寂寞幽静なりし湖畔の地も、漸く人の影の見えるじて、湖上に泛へる小舟の数も、次第に多く／＼なりしが、都門の炎蒸早九十三度に上りたりと伝へられたる七月廿九日には、中禅寺湖畔に宿せる客のみにても、西洋人二百五十名、内国人二百余名と注せられぬ。そのほかにも『日光』には、「西洋書籍店の小僧のこくりくと居眠りせる」という記述がある。「内国人」よりも多くの「西洋人」がときとして滞在し、「西洋書籍店」が並ぶほどの賑わいがすでに明治中期の日光にはあった。

このような事態が日光に起こった背景には、西洋風ホテルが他の地域に先駆けて誕生したことや、サトウとチェンバレンの二人がそれぞれ日光と宮ノ下を好んだという事実をあげることができる。^②『A Handbook for Travellers in Japan』が当時唯一の充実したガイドブックであったことを考えると、同書による旅行者の誘導を過小評価してはいけないう。ガイドブックをめぐって生じる〈旅のエコノミー〉は、徹底的な「選択／排除」の構造も生じさせる。その構造がガイドブックの読者＝旅行者を日光や宮ノ下に導くのだ。花袋が記す「内国人」と「西洋人」が、日光において眼差す先にある風景は両者に共通しているかもしれない。しかし、両者を日光に彼ら、彼女らを連れてきた力は、まったく異なるものだったのである。そして、『A Handbook for Travellers in Japan』第八版で見られるようなありようが、結果として日本版シリーズの終了という事態を招いた。旅行者が訪れないであろう拡大された新しい〈日本〉でさえも迅速、詳細、正確に記述されるべきガイドブックという媒体の性格と、前章までで見てきた日本版特有の事情から生じた性格が、齟齬や矛盾として八版で衝突している。もちろん記述の正確さと紹介したい場所や事項をめぐってのこのような対立は、多かれ少なかれガイドブックが持つ運命の一つであろう。だがその対立が、引き返すことの困難な状況にまで至っているのが、この時期の『A Handbook for Travellers in Japan』なのだ。この章冒頭に述べた曖昧、両義性と、齟齬、矛盾という語の距離は近い。第八版の序文には次のような一節がある。

At the same time, it has been borne in mind that picturesque “Old Japan,” so far as it still survives, is what the majority of intelligent persons come out to see.

絵のように美しい「古き日本」picturesque “Old Japan,”を旅行者が求めるであろうと願うこの引用は、そのような文脈で読むと痛々しささえも感じられる。イギリス本国から遠く離れた地で研究成果を競い合っていた未知の〈日本〉が、あるいはその地に住んで旅行者に見せたいと願った〈日本〉が、いまだあるのは確かだろう。だが詳細、正確に記述するというガイドブックの性格を維持するには、初版をはじめとする時代からは、あまりにも時間が経過してしまった。「新しき日本」を詳細、正確に記述する熱意を八版から読み取ることが難しい。

第九版の発行は一九一三年、すでに二年前にチェンバレンは日本を離れてスイスのジュネーブにいた。もちろん『A Handbook for Travellers in Japan』のシリーズ終了は、直接にはチェンバレンという傑出した才能の離日によるところが大きいのだろう。だがしかし、仮にチェンバレンが日本を離れていなくても、シリーズが存続したか否かの判断は難しい。最終第九版の序文に次の記述があるのは示唆的だ。

Japan's new possessions on the Asiatic mainland, differing widely as they do in language, customs, etc., from Japan proper, do not fall within the scope of this work.

新たに拡大した〈日本〉の記述を最初から放棄する姿勢は、この版になってはじめて見られるものだ。第八版と九版の発行の間に、新たに組み入れられたのは朝鮮半島である。だがその地のガイドを、われわれは『A Handbook for Travellers in Japan』で見ることができない。もちろん、そこを〈日本〉とする記述を目にしないことは、本来当然で幸いなことであるのだけでも。

やむ『A Handbook for Travellers in Japan』の読者たちが日本に到着して旅行に出た際に、彼ら、彼女らが経験したのは、

ガイドブックを読んでいたときは正反対の経験だったであろう。小論の冒頭にあげた『三四郎』に登場する西洋人と同様、旅行者が経験したのは「見られる者」としてのそれだったはずだ。「見られる者」としての旅行者の姿は、ガイドブックではなく旅行記や紀行文といわれるテキスト群の分析が必要となる。なぜなら、ガイドブックが想定する旅行が時間的には読む体験の後であるのに対して、旅行記や紀行文に記される旅行はすでに終わったものだからである。「見る」主体としての「日本人」が、ガイドブックにおいては立ち上げられることがないから、といってもいい。旅行記や紀行文の分析の対象としてはたとえば、一八七八年来日して北海道にまで足を伸ばしたバード Isabella L. Bird に代表されるテキスト群が存在する。⁽²³⁾ それらの分析は別稿を用意したい。

註

- (1) 『三四郎』からの引用は『漱石全集 第五巻』（一九九四年 岩波書店）による。
- (2) 同書は第九版まで発行され、そのうち第二版および第三版には以下の翻訳がある。ただし小論では、第八版をおもな対象とすることと翻訳ではうかがいにくい表現を分析する個所のあることから、原則的に引用は原文を用いた。
楠加重敏訳『チェンバレンの明治旅行案内——横浜・東京編——』（一九八八年 新人物往来社 第三版の抄訳）
庄司元男訳『明治日本旅行案内 上巻 カルチャール編』『同 中巻 ルート編1』『同 下巻 ルート編2』（一九九六年 平凡社 第二版の本文全訳）
庄司元男訳『明治日本旅行案内 東京近郊編』（二〇〇八年 東洋文庫 第二版の抄訳）
(3) 宮武公夫「黄色い仮面のオイディプス・アイヌと日英博覧会」（『北海道大学文学研究科紀要』115 二〇〇五年二月）
(4) 「日本」をめぐる海外からの旅行に関する最近の成果として、内田宗治『外国人が見た日本——「誤解」と「再発見」の観光150年史』（二〇一八年 中公新書）がある。
- (5) 小論は、論の展開上拙論「海外としての〈日本〉——英語版の旅行ガイドブック（『日本近代文学』84集 二〇一一年五月）と重複する個所があることをお断りしておく。
- (6) 荷風に關しては、『ふらんす物語』は『荷風全集 第五巻』（一九九二年 岩波書店）に、「年譜」は『同全集 第三〇巻』（一九九五年 同書店）による。なお付記しておけば、一九〇九年五月一〇日にベンガル湾上で死んだ二葉亭四迷が乗船していたのも日本郵船の賀茂丸であった（伊藤整『日本文壇史14 反自然主義の人たち』一九九七年 講談社文芸文庫）。
- (7) 日本郵船に關しては、日本郵船株式会社編『日本郵船株式会社創立滿三十年記念帖』（一九一五年 同社）、同『日本郵船株式会社渡航案内』（一九一六年 同社）、小風秀雅「遠洋航路と総合商社」（土田直鎮・大石慎三郎ほか監修『海外視点・日本の歴史13 和魂洋才の日々』一九八六年 ぎょうせい）などを参照した。
- (8) 二葉亭の往路や日英博覧会の取材でロンドンに向かった長谷川如是閑のように一九〇一年に一応の完成をみたシベリア鉄道を利用した旅行者、また一八八〇年代に結ばれたカナダ太平洋鉄道で北米大陸を横断して太平洋航路を利用した旅行者もいただろう。

- (9) 荷風自身が日本からアメリカに渡ったときには、一等船室を利用している。
- (10) 「西伯利經由なら450円位で十分なれど倫敦經由にて海路を執る時はどう儉約しても800円程は掛る」(明治四十二年三月二十六日 長谷川柳子宛書簡)『三葉亭四迷全集 第七巻』一九九一年 筑摩書房』
- (11) シモン・ブレー社とハンドブックに関つては、W. B. C. Lister『A Bibliography of Murray's Handbooks for Travellers』(一九九三年 Derhambrooks) Alan Sillitoe『Leading the Blind——A Century of Guide Book Travel——』(二〇〇一年 Picador)『Oxford Dictionary of National Biography』(二〇〇四年 Oxford University Press)などを参照した。
- (12) 註(11)にあげた資料類によると、両者の厳密な先行順位は明確ではないようだ。ただし一九世紀後半になると、英語版にも力を入れたベディカがイギリス国内においてもマレーの存在をしのぐほどになっていたらしい。塚本利明『漱石と英文学——『漾虚集』の比較文学研究』(一九九九年 彩流社)によると、漱石がロンドン滞在中に用いたのが『Baedeker's London and its Environs』の一八九八年版である。
- (13) 「著者」と訳した原語は「author」である。小論文「著者」と記す場合は「編者」あるいは「編著者」の意味も含んでいることを了承されたい。個々の記事に関しては「執筆者」という語を用いた。
- (14) 立脇和夫監修『幕末明治 在日外国人・機関名鑑 Ⅲ』(一九九六年 ゆまに書房)
- (15) 萩原延壽『西南戦争 遠い崖——アーネスト・サトウ日記抄13』(二〇〇一年 朝日新聞社)
- (16) James Hoare『British Journalists in Meiji Japan』(Ian Nish『BRITAIN & JAPAN Biographical Portraits』一九九四年 Japan Library)
- (17) 日本アジア協会に関つては、『Transactions of The Asiatic Society of Japan』創刊号(一八七四年 Japan Mail Office) 楠家繁敏『日本アジア協会の研究——ジャパノロジーとはじめ——』(一九九七年 日本図書刊行会) 秋山勇造『日本アジア協会と協会の紀要について』(「神奈川大学 人文研究」第152集 二〇〇四年三月) おおむね同協会のHPなどを参照した。
- (18) 中野明『世界漫遊家が歩いた明治ニッポン——忘れられない日本の姿』(二〇一六年 ちくま文庫)によると、第四版の五円という値段は、それが出された少し前の「小学校教員の初任給」に等しい。
- (19) その時期に英語で出された〈日本〉への旅行ガイドブックは、大英図書館における調査での管見に入った限り次の二冊である。
Frank Charlton『The Eastern Traveller's Guide』(一九〇一年 William Clowes and Sons, Limited)
The Welcome Society of Japan『A Guide-Book for Tourist in Japan』(一九〇五年 貴賓会)
前者は判型もマレー版の半分ほどで約一〇〇ページ、日本のほかインドや中国、オーストラリアなどに関する記述が含まれたもの。後者は東京に本拠を置く喜賓会によるもので、序文には、詳細な情報を求める旅行者には『Murray's Hand-Book for Japan』を推奨するとの記述がある。
また、マレー版の最終である第九版が出版されたのと同じ一九一三年からは、『鉄道院から』『An Official Guide to Eastern Asia』というシリーズが出されており、『Vol.2 South-Western Japan』『Vol.3 North-Eastern Japan』の二冊が知られてる。『日本の』鉄道院が出した『Official Guide』はシリーズ全四冊で、Vol.1が『Manchuria & Chosen』Vol.4が『China』で、あつたことは注意されよう。
- (20) たとえば、サトウ『アーネスト・サトウ 神道論』(庄田元男編訳 二〇〇六年 東洋文庫)を参照されたい。
- (21) 第九版の記述は、『(Including Formosa)』といふものである。
- (22) 庄田元男『異人たちの日本アルプス』(一九九〇年 日本山書の会)には、「サトウは日光を好み、後年の一九〇二年の駐清公使のころ、わざわざ当地に土地を求め、別荘を建設している。チェンバレンの箱根宮ノ下への思い入れと一脈通ずるものがある」との指摘がある。
- (23) イザベラ・バード『イザベラ・バードの日本紀行(上)』(一) (時岡敏子訳 二〇〇八年 講談社学術文庫)

*本論は、二〇一九年度に二松学舎大学海外特別研究員としてロンドン大学 SOAS に滞在した際の成果の一つである。